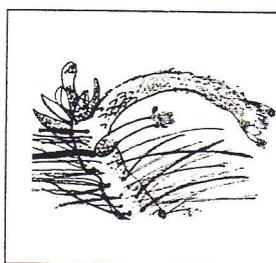


論説



日本原子力発電は敦賀1号機を廃炉する方針を決めた。3、4号機増設計画が背景にある。核燃機構の新型転換炉「ふげん」の廃炉も決定しており、スクラップ・アンド・ビルドの段階を迎える。廃炉は増設以上に難事業である。安全の徹底を求めた

廃炉と増設

敦賀1号機（二十五万七千瓩）は一九七〇（昭和四十五）年三月に運転開始した日本で最初の商業用軽水炉である。大阪万博へ原子の火を送った原発として知られる。

運転以来三十年余りを過ぎ廃炉の方針を明らかにした。二〇

原発を処分するのも難事業

一〇年度中に停止の予定だから約四十年間の稼働になる。商業用軽水炉のさきがけになり、次は廃炉のさきがけになる。そういう運命を担った原子炉になった。

廃炉といっても容易でない。原子炉を壊し、廃棄物などを含

め安全に処理するにはおそらく十数年の歳月と膨大な費用を要する。いったん造った原発は後始末まで大変な労力と費用、何より安全管理が伴うことを銘記したい。

敦賀3、4号機増設への引き

換えになったともいえる。県は県内の原発を現在の十五機に抑

えたい方針を打ち出している。

3、4号機増設には二機の廃炉が伴うわけで、「ふげん」と敦賀1号が対象になっていた。

核燃が「ふげん」を、日本原子力発電は敦賀1号機の廃炉に踏み切ったので、スクラップ二機が決まったわけだ。代わって3、4

号機のビルド計画が具体的にテールに乗ってきそうだ。

来年三月に運転を止め廃炉研究に活用する「ふげん」は、ブルトニウムとウランの混合燃料（MOX燃料）を利用した原発だ。十六万五千瓩と出力が小さい炉だったが、MOX燃料をこ

れまでに七百四十八体装着した

実績は案外知られていない。

MOX燃料を燃やすプルサーマル計画は今、安全性に問題ありと批判されて商業炉で実施に移せないでいる。しかし「ふげん」では使用され研究されていた。

ちぐはぐに見える実情は日本

の原子力政策の一貫性を欠く見本といえよう。「ふげん」の研究成果をどうするのか。廃炉とともにせつかくの技術をも廃棄するのか。燃料の安全性、廃炉への技術は今後に生かされてよい。

今後の原子力政策に技術を生かす方策の方が大事で、スクラップ・アンド・ビルドを優先させて原子炉や燃料の安全論議が後回しになるのは避けたい。

「さあ壊す、だから新しく造れ」の議論には乗っていけない。日本の経済環境の変化につれ、電力事情も大きな変化を見せている。経済、社会情勢の中で、原子炉の新増設、適正な規模などを見極めた上で冷静な対処を願おう。